



令和2年3月24日発行 中等新報第46号
新潟県立村上中等教育学校長 吉井 裕也

終業式に代えて ～ 6年生の健闘から学ぶ ～

校長講話

3月17日、卒業式の「答辞」で東さんが読み上げた言葉、「迷ったら苦しい道を行く」。6年生は、この言葉を胸に、自らの進路希望の実現に向けて必死に頑張り抜きました。毎週のように受験した全国模試や無我夢中で取り組んだ第一志望校の過去問演習。夏休みくらいまでは何の手応えもなく、落ち込んだ日々もあったはずですが。秋の記述模試では、今までになく厳しい志望校判定に、不安ばかりが募りました。それでも、かれらは地道に努力を積み重ねました。6年生が闘い抜くことができたのは、自分自身に対する「矜持(きょうじ。自分の能力を信じてもつ誇り)」と「意地」があったからではないでしょうか。

受験準備は孤独との闘いでもあります。難関を突破するには、自分と向き合い、自分に足りないところを見出し、それを一つ一つ克服していかなければなりません。この作業自体は、誰の助けも借りられません。自分にとって最も集中できる場所と時間を確保し、膨大な情報を暗記する手順や方法を自分で組み立てる。自分のバイオリズム(肉体・感情・知性にみられる一定の周期的リズム)を踏まえて、ひと月、一週間、一日の時間管理について考える。人は皆、好みや感じ方が違うので、今言った「時間」との向き合い方も千差万別のはずです。効率的な時間の使い方について、一般的なコツは、経験を積んだ先生方が教えてくれますが、それが自分にぴったり当てはまるとは限りません。先輩や友達から得たアドバイスにしても同様。実際に試してみる時間がどうしても必要になります。何度も試行錯誤を繰り返し、他者から教わったやり方を、自分に合うように修正していくことが欠かせないのです。

なぜ1年生の時から、毎日たくさんの課題を出されるのか、考えたことがありますか。「頭を良くするため?」、「忍耐力を身に付けるため?」、「成績を上げて、将来の進路決定を有利にするため?」いずれも間違いではありませんが、一番大切なことは、毎日課題に取り組むことをとおして、自分の学習の癖、時間の使い方の癖をしっかりと自覚するためなのです。ですから、課題に取り組むに当たっては、受け身であってははいけません。上に述べたように、自分なりの学習のやり方、自分にとってより効率的で、知識の定着度の高い方法を考えながら、課題に向き合うことが大切です。課題が出たとき、答えを丸写しにして提出するなどは、全くの時間の無駄です。

6年生が持つことができた矜持とは、中等生活をとおして、他者とは異なる「自分」を見出したことに由来するのです。

六煌祭での全員リレー。ひたすら前を向き、全力で駆け抜ける6年生。この勢いそのままの1年間でした。



新潟県立村上中等教育学校

〒958-0031 村上市学校町6番8号 TEL.0254-52-5101 FAX.0254-53-6773

HPアドレス <http://www.murakami-ss.nein.ed.jp>